

春子と夏子

豊

子

二

むかしくある處に二人の美しくいお姫様がいらっしやいました
た或日の事お父様のおっしやるのに「お前達も大きくなつたから
二人でお隣の國までいってごらん」

とのおいゝつけでした。そこで姉さんの春子姫はいたって素直な方
でしたからすぐに「はい」とおっしやって旅立の仕度にかゝられま
した。

まづお父様からはお金お母様からは少し許りのパンとをいたゞ
いて住なれたなつかしい御殿を見返りく幾度も
「お父様お母様夏子さんいって参ります」といってやがて一足くか

げも少すくさくなり聲こゑも聞きえなくなりました。

で、だんく歩あるいて行ゆきますと、いつか廣ひろいく、野原のほちに出でました。

今迄御殿いままでおてんの御庭おにばより外ほかあるいた事ことのない春子姫はるこひめは、足あしもつかれ道みちも分わからず、其内そのうちだんくと日は暮くれかゝるしどをしようかと心細こころざくなつて立たつて居をりますと、向むかふから白しろい長ながい鬚ひげのはえたお爺おやさんんがとぼくとあるいて來きました。やがてお姫様ひめさまのそばへ來きて、
「あの御姫様おひめさま私はもを二三日まへ前から何なにもたべずおなかぐすいてたまりませんとをかあなた持もつてお居ゐでのパンを少すくし下ください」

と云いひますので、春子はるこさんは自分じぶんの御腹おなかのすいた事ことも忘わすれ、

「まあ可哀あはれ想そうに、では此このパンみんなあげませうね」

といつてお母様おははさまからいたゞいて來きた晩ばんの御辨當おべんたうをみんな出だして

やりました。するとお爺さんは大層よろこんで、

「御姫様之から少し行くとぼらの垣根があつて中々通れませんか、其時は之で垣を分けていらっしやい」と云つて一本の細い杖をくれしました。

春子姫はお爺さんに道を教はつたので、悦んで其方へ行きますと、大層なぼらの垣がありました。杖とく重りあつて一寸もあるとげが一面に出て居ます。どんな強い人でも、中々通れそうもないのでした。が、春子姫はさつき貰つた杖で道を分けく少しも、とげにつゝかれもしないで通りこしました。が、中々骨が折れてくたびれたので、丁度そこにあつた古井戸のそばに腰かけて休んで居りました。すると是は不思議、其井戸から少さなきたないお婆さん

が顔を出して、

「お姫様、今日ばよいお天氣で御座います、どをかわたくしの髪をとかして下さい」と云ひました。

春子姫は、あまりの事にびっくりしましたが見ると可愛らしいお婆さんで、髪の手がめちやくです。云ふなりに自分の立派な櫛で奇麗にとかしてやりました。お婆さんは大悦びで、にやにやしながら、

「あなたはほんとうに優しい心の御方だから、之からあなたの歩きたんびに、いゝ香のするやうにしてあげませうね」

といつていつのまにかひっこんでしまいました。すると又一人のお婆さんが首を出して、

「お嬢様今日はよいお天氣で御座います。私の着物が大層破けましたからお嬢さんの着物を一枚何うぞ私に下さいまし。」と云ひますから

「あゝそをさね、それでは此上衣を上げ様下着は汚れて居て穢ないから。」と云ってきれいな上衣を遣ってしまいました。お婆さんは大層悦んで「是れはく何うも有り難う御座います。其代り貴女が歩くと貴女の着物が立派なものになる様にして上げませう」と云ふかと思ふと居なくなってしまうました。すると又一人飛び出しました。そして今度は大層おう柄に

婆「おい〜お前は先刻からも大分休んで居たらうから私の肩を叩いてお呉れと云ひますので今度は按摩さんをして遣りまし

た。けれど何時迄経つてももをいゝと云ひませぬので手が疲れて肩が痛くなつてしまいました。ヤがてのことに、

婆「あゝ大分樂になつた。もをよからう」

と云ひながら有りがたうとも云はないでどんく井戸の中へ入つて行きました。で、もを見えなくなるかと思ふ頃に後を振りかへつてそして急ににこくししながら

「お嬢さん貴女はまあなんと優しい方でせう。私は今日の御禮に是から貴女を世界一の仕合せ者にして上げませう」。

と云つて見えなくなつてしまいました。そこでお姫様も大分休みましたからそろくと又出掛けて行きますと、だんく町に近くなつて來たので人通りが多くなつて此子の傍を通る人が殖え

て來ました。すると不思議なことに通る人もくも皆

入

「あゝ、きれいな着物だな、何んと云ふ立派なお姫様だらう。おや何んだか好い香がするよ、あ、お姫様の香だ、あゝ好い香だなあ——」と皆感心して居ました。すると丁度此處を隣り國の王様がお通りになつて大層御悦びなさつて、

「私に子供がなくなつて困つて居たのだから此子を私の子供にしやう。」と云つて遂うく王様のお姫様になつて大層仕合せな人になりました。

さて、姉様が隣り國の王様のお姫様になつたと云ふことをお父さんやお母さんの處に知らせて遣ると例の欲ばりで意地惡の妹の夏子姫は「私も姉さんの様に旅をしてそして王様のお姫様にな

らうや」と思おもつてお父ちちさんにお願ねがひするとお父ちちさんは

「父ちちもお前まへも姉あねさんの様ように旅たびがしたいかうんく宜よからう。けれどお前まへは家うちに居ゐた時ときの様ようにしはん坊ぼうや不深ふせん切せきな事ことをすると姉あねさんの様ような仕合しあはせな人ひとにはなれないよ。と云いひましたが妹いもうとはお父ちちさんのおおつしやつた言ことばを何なんとも思おもひませんでした。そしてたくさんのばんを持もつてだんく歩あるいて前まへの森もりの所ところへ來きました。茲こゝで少し休やすんで居ゐますと又また先刻さつぷのおおちいさんが出でて來きて

「是こゝれはくお姫ひめ様さま今日こんにちはよいお天てん氣きで御座ございます。私わたしは今朝けさからまだ御飯ごはんを戴いだませんのでお腹はらがへつて堪たまりません。何どうぞ何か喰たべるものを頂いたきたう御座ございます。」と申もうしますと夏子なつこ姫ひめは頭あたまを振よつて、

「いやだよ、お前まへなんぞにやるものはないよ、此こゝろばんは私わたしがお腹なかが
へった時に食たべるのだからいけないよ」と云いって何なにも遣やりませ
んでした。やがて此處こゝを出でてだんく行ゆくと薔薇ばらの垣根かきねの所ところに
來きましたが、竹たけの杖つえがないので薔薇ばらを開ひらくことが出で來きません。仕
方かたがないから一生懸命いっしょうけんめい手てでかき分わけて通とほったので顔かほやら手足てあしや
らそこら中ちゆう創きつだらけになつて漸やうやくのことに向むかふへ出でられました
少せうしく行ゆくと道傍みちばたに井戸いどがありましたので
是これは幸さいはひ先まづ一ひと休やすみと水みづを汲くみ喉のどをしめしながら休やすんで居ゐり
ますと井戸いどの中なかからまた穢きたない一寸法師いっすんぼうしの婆ばあさんが出でて來きまし
た。そしてまた髪かみを結ゆひ直なほして下くださいと云いひましたが、夏子なつこ姫ひめは
「いやだよ、まあこんな穢きたない頭あたま、いぢれるものかね」

と云ってかまひませんでした。すると、井戸のお婆さんは

「よし／＼そんなに邪慳にするなら是れからお前さんの歩く度にお前さんの身体から臭い香の出る様にして上げるからいよ」と云ひながら井戸の中へ入てしまいました。すると今度はまたほろ／＼の着物を着たお婆さんが出て来て、

「お嬢さん何うぞ私に着物を一枚戴かして下さいと云ひますと、
妹 いやだよ、お前なぞに遣る着物はないよ。此着物を脱ぐと私が
寒いからいやだよ。」と云って遣りませんでした。お婆さんは

「よし／＼それではお前さんの着物を穢ない／＼着物にして上げるからいよ」と云ひました。此一寸法師が居なくなると直に今度は横柄なお婆さんが出て来て

「これく夏子姫、お前はもを大分休んだから少し私の肩を叩いてお呉れと云ひますと、夏子姫はさも呆きれたと云ふ風で

「なに？ 肩を叩けて、夫れはまあ誰に云ふのだへ乞食の癖に、私はお姫様だよ、下女や按摩さんではないよ、」

と云つて少しもかまいませんでしたのでお婆さんは、大層怒つて「よし／＼夫れではお前を今に世界一の不仕合者にして遣るからいよ」と云ひながらかくれてしまいました。

夏子姫は少し疲勞も休まったので此處を出で町の方へだん／＼來ると通る人もくも夏子姫の傍を通りながら皆鼻を摘まみ顔をしかめて

「おゝ臭い／＼何と云ふいやな嗅だらう、此娘は一体何んだへ。」

と云って笑って居ました。

そをすると向ふから一人のでいゝ屋が

「でいゝいゝ」と云ひながらやって来て

「おゝ私は子供がなくて困って居た所だ、けれど私には誰れも子供を呉れる人がないから、彼の娘を私の子にしよう」と云って遂に
いゝいゝ屋の子にしてしまいました。

おしまい。

本お伽話には二枚の挿書を致す等で原稿迄出来上りましたが、彫刻が間に合はないので遺憾ながら入れられませんでした。次號よりは必ず澤山の挿書を致しますから其御積りで本號だけは御容謝を願ひます。

